

Title	洛星高校の授業にコーディネーターとして参加して
Author(s)	樫本, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10422">https://hdl.handle.net/11094/10422</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 洛星高校の授業にコーディネーターとして参加して

榎本 直樹

「発言とその人自身を切り離すこと」、これは後期最後の授業で行った「対話」についての話し合いの中である生徒が発した言葉である。私は進行役をしていて思わず考え込んでしまった。記憶を辿ると、彼は対話のなかでは上にあげたようなことを普通に行っているはずで…という趣旨で話していたように思う。しかし、実際私自身の普段の姿を思い起こしてみると、発言とその人自身を切り離すということができているかどうか疑わしい。情けない話、こんな発言をしたら笑われるんじゃないか、私自身がバカと思われるんじゃないか、などと変な想像をめぐらせてしまう。逆に相手に対してそう思っていないかと自分に問いかけてみると「していない」と自信をもって否定できないところが悲しい。しかし、考えてみると「対話」の成立にとって、発言とその人自身を切り離すことというのは大事な要素のひとつであるように思える。「対話」とはその場でできた発言を素材にして展開される。そうである以上、そこに居合わせる他の人が、発言と私自身を切り離して扱ってくれるということに対する信頼がないと成り立たない。そういう信頼をどうやってつくるかが鍵になるのか、などと考

えさせられた。この感想を読んでくださる人にとっては、今私が書いたことは当然のことなのかもしれない。でも周りの人がどうしても気になってしまう私が考えさせられたこととして報告しておく。

さて、個人的に考えたことはさておき、私を含め4人のコーディネーターが洛星高校で行われる「哲学」の授業を引き受け、4月から1年間の方向性を決め、授業を担当する講師を選出、依頼し、授業の記録を担当した。私はその1人として参加した。今ふり返ってみると、大きな脱線もなくおおむね最初の計画どおりに進んでそれなりに満足している。私たちの目的は、単に知識を伝達するような授業ではなく、授業のなかに「対話」という要素を組み込むことによって、生徒自身が考え、「哲学する」ような授業にすることだった。担当していただいた講師の方々には、上記の目的を理解していただき、さまざまな工夫を授業に取り入れてなんとか生徒の発言を引き出すように努力していただいた。とくにゲーム形式を使った対話は、生徒にとって新鮮であったようである。しかし、講師の方々を含む私たちの「想い」が生徒に伝わったかどうかは微妙であった。生徒の感想を読む限り、「対話」をつかっても深まっていけないじゃないか、声の大きい方が勝ちなんじゃないのか、これは「対話」になっているのか、という趣旨の不満が多く寄せられた。こうした不満は最後まで解消されたとは言い難い。

コーディネーターとして授業に参加して問題だと感じたことは、まず70分という時間的な制約があること、また先生が毎回代わるために、先生と生徒側双方に遠慮があることなどである。そして最も大きな問題は、生徒の側に自分たちの発言を通して授業を組み立てようとする生徒と、のちのち役に立つ(使える)知識が欲しいという生徒の2種類がいる、ということであった。私たちはそうした意識のズレがあることはわかった上で、対話にはなっていないかもしれないと思いつつも、あえて授業スタイルを変えることはしなかった。私たちとしては、もちろん授業を受ける側として「知識が欲しい」という生徒のニーズは理解できるし、それが悪いとは思わない。ただ、なんでこの人たちはあえて論点を絞ったり、議論に介入したりしないのかという疑問(時には怒り)を通して、自分が授業を受けることによって何をしているのか、ということについて何か感じてもらえればと密かに考えていた(勝手な期待ではあるけれども)。

授業を通して、そしてコーディネーター同士の打ち合わせを通して、1年間「対話」ということについていろいろ考えさせられた。違う感じ方をもった人がテーマに入りやすくするためのスタートラインのようなもの、遠慮を解きほぐす何か、そして発言とその人自身がきちんと分けて扱わ

れるということへの信頼をもたせるような仕掛けが必要だろうということ等である。生徒たちに、その片鱗でも提供できたのかどうか自信がもてない。コーディネーターの反省点として今後考えていきたい。

ある生徒が、これも最後の話し合いの中で、「なんか対話は、会話と違って、他の人に意見がどんどん自分に入ってきぐちゃぐちゃになってなんか嫌」という趣旨のことを言っていた。私も同感である。でもみんな比較的明るい表情だったので、こんな授業もあっていいのかなと思った。

いろいろ考える機会を与えてくださった、校長先生をはじめ、洛星高校関係者のみなさま、そして生徒のみなさんには心から感謝致します。そして実際に授業を担当していただいた方々、本当にありがとうございました。コーディネーターのみなさんお疲れさまでした。

(かしもとなおき)

